

コロナ危機とグループリビング



博士（社会学）
近兼路子

世界的に新型コロナウイルス感染症の拡大が急激に人々の生命を危機にさらしており、日本でも緊急事態宣言が出されるまでの状態に至っています。ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックは、現代の社会について、文明社会に生きるわたしたち自身の行為が、結果として、地球規模の問題や危機をもたらしていると指摘し、それを「世界リスク社会」と表現しました（ベック 2002=2010）。わたしたちは、グローバル化の進展によって恩恵も得てきましたが、全世界的な「平等な危機」も経験することになったといえるでしょう。

現在、世界各地で、この危機を克服するためには国家間、個人間の協力が重要だとの声が上がっています。しかし、新型コロナウイルスの見えない脅威や、経験したことのない社会状況に、自らの安全のみを迫及する行動や、政府による強制的措置を求めて、他者への寛容性を失い、自由の放棄へと向かう動きもあります。国内の例を挙げれば、感染者がでた大学に脅迫めいた抗議が殺到しているという悲しいニュースがありました。

ベックが指摘するように、「世界リスク社会」における協力では、「自己決定を自国の利益のみに短絡的に結びつけられた状態から解放し、世界の利益に開かれたものとしていくことが重要」です。これは、個人レベルでも当てはまることだと考えます。「自国」を「個人や特定の集団」に、「世界」を「地域社会」に置き換えてみるができるでしょう。「自立と共生」を理念とするグループリビング（以下、GLと表記します）は、まさに、日常的にそれを実践していると考えます。

病気や介護など困難な状況に陥った際、家族には、そのメンバーがどのように協力し対処すればよいかという、長い歴史の中で培われてきたガイドラインのようなものがあります。家族のかたちや変化しているとはいえ、「こうすべき」という参照可能な規範は今でも残っているといえるでしょう。また、行政の支援制度も家族を前提としたものになっています。

一方、GLは、異なる人生経験と多様な価値観を持つ人びとが、互いの生き方を尊重し、支え

合う新しい暮らしです。日常生活の共同のためのガイドラインさえあるわけではなく、運営者・スタッフと居住者との間、居住者間の協力は必ずしも容易とはいえません。つまり、日々の生活自体が、新たな課題、問題に対応するレッスンの場になっているといえます。

昨年度の JKA の調査では、問題に突き当たった時には、いつも運営者、スタッフ、居住者が知恵を出し合って解決しようとしているとお話がありました。すべての関係者が GL の運営という共通の「仕事」に、共に責任をもって、主体的に参加することが GL の重要な特色の 1 つだと考えます。また、GL は家族のように社会に組み込まれた制度ではないため、国や自治体に依存することなく、自ら家族・親族、地域社会、地方行政などと水平的な協力関係を構築している点も重要です。

政治学者の齋藤純一は「具体的な他者の生／生命への配慮・関心によって形成・維持される」人びとの関係を「親密圏」と名付けています（齋藤 2000）。GL は、自立と共生によって「新たな生きる基盤」を創造する開かれた親密圏といえます。コロナ危機という、これまで経験のない事態に対応するために、また、コロナ危機後の社会を創造するために、こうした GL での実践が求められています。コロナ危機の最中にある今こそ、運営者、スタッフ、居住者のみなさまの重要な試みが社会で参照されることを願っています。

グループリビング運営協議会メンバー募集中

グループリビング運営者のもとより、これから作りたい人、応援したい人、研究したい人、またグループリビングという名称に拘らず、グループリビングに類似した共生の住まいも対象にしております。

【活動内容】

1. グループリビングへの支援・相談
2. ワークショップの開催
3. ホームページの運営
4. グループリビングの調査研究
5. その他、本協議会の目的を達成するために必要な事業。

詳細は以下の URL にあります。

<http://glnet-groupliving.org/glnet/glnet-recruit>



この会報は、公益財団法人 JKA 補助事業
「お年寄りが幸せに暮らせる社会を創る活動」で
運営されています。

住んでみたグループリビング

えんの森住人
安岡芙美子



えんの森は開設より 8 年、定員は 10 人だが現在は 8 人が暮らしている。高齢化が進み 95 歳、94 歳の 3 人を筆頭に 80 歳以上が大半を占めるようになった。高齢者仕様のバリアフリーの建物と設備でプライバシーが守られる。食事が夕飯のみ提供されるというのもありがたい。3 食付くと生活時間が束縛され、ひいては生活全体の管理につながる。ちなみにここの住人は宵っ張りの朝寝坊が多い。

さてその暮らしぶりとはいうと、その時々々の住人の特性や今までの暮らし方によって変化しながら、妥協できる一線がなんとなく決まってきた。大半がえんの近辺で職・住をもっていた地域住民である。生活感覚や価値観はかなり似通っている。とはいえ細かいところでは食事の味付けひとつ皆さん一家言あるのだ。住民同士の関係性の持ち方に自然な無理のないコンセンサスを持つことが必要である。特に「共生」という理念の解釈は各自かなり認識にずれがあることが多い。これは平たくいえばお互い無理のない範囲での助け合いであるが、入所当時には、みんなが自分を助けてくれる、これはいい所だと一方的に思い込んだり、家族同然なんだからと遠慮なく他の住人の暮らしに踏み込んで顰蹙を買うこともあった。しかし時と共に、あくまでも他者が独立して自分の生活を営むところであり踏み越えてはならない一線があることが共有されるようになった。

冷たい人間関係のグループリビングだと思われるのかもしれないが、長年暮らす中で、特に夕食後ゆっくりと団らんすることにより、お互いの気心を知ることができ、老後にできた貴重な友達関係ができることも多く、老化の何たるかを学びあい、相互にいたわることが日常的になっている。(80 歳 90 歳を過ぎ、身の回りの人が亡くなっていく中で、新たに友人ができることはすばらしいことと思いませんか)。

相互の助け合いは良くされていると思う。安否確認はそれぞれ意識しており、物音を聞きつけて部屋に飛び込むことは頻繁である。実際これまで 5 件ほど骨折、病気などで倒れた時の発見、救急車を呼ぶ、病院に付き添うなど、住人同士の対応で処理している。なぜかなにかが勃発するのは夜間、土、日、年末などが多いようだ。運営法人事務所が隣接するとはいえ、将来的に住人の相互扶助が無理になった場合、24 時間の対応は課題として残るであろう。

最後に、グループリビングという住まい方は人間を性善説で捉えることで成立しているという印象をもっている。イージーライダーのような人が住人となった場合の対応はきわめて難しい。といって管理のために内部に職員を常駐させれば、いまのようなグループリビングの独立した生活は望めなくなるのではとの危惧もある。

今後の課題も多いが、夕食後の団欒のなかで「ここで暮らせてよかったね」というのが住人一同の感想である。

JKA 補助事業のご報告とお知らせ

1. 2019 年度 JKA 補助事業の延長

3月に予定しておりましたシンポジウムはコロナウイルス感染防止ために中止いたしました。それにともない、事業期間の計画変更をJKAに提出し了承されました。事業終了は2020年3月末から9月末に変更となります。シンポジウムは9月前後に行う予定にしておりますが今後の状況をみつつ6月頃に開催の判断をいたしたいと思っております。

2. 2019 年度 JKA 補助事業 調査終了

8件のグループリビングの調査を終了いたしました。ご協力くださった運営者、調査員の皆様、ありがとうございました。

調査結果は、シンポジウムで発表しディスカッションを行うとともに、事業が終了する9月末に報告書として会員の皆様のお手元にお届けいたします。



1月17日 たすけ愛の家



1月23日 COCO せせらぎ



2月7日 てのひら



2月13日 COCO 湘南台



2月14日 えんの森



2月17日 COCO 宮内



2月18日 モーニング



2月20日 おでんせ中の島

3. 2020 年度 JKA 補助事業の採択

2020 年度 JKA 補助事業が 4 月に採択されました。2020 年度のテーマは 2019 年度と同様に「高齢者グループリビングと地域ケア資源の連携に関する研究」です。事業の概要は以下です。

I 補助事業が最終的に目指すこと

社会的課題の現状

最初の高齢者グループリビング COCO 湘南台が開設してから 20 年が経とうとしている。この間、介護保険制度の創設と見直しがあり、現在は医療や生活支援と一体となって地域包括ケアシステムの構築が目指される状況になっている。元気な高齢者が暮らす場所として出発したグループリビングも、こうした方向性のなかで地域のケア資源とどのように連携していくかという課題に向きあう必要が出てきた。JKA の補助で開設した初期のグループリビングは 10 年以上が経過し、この課題に対する経験も蓄積しつつあり、その活用が求められている。

目指す姿

高齢者グループリビングは、ケアを目的としない共同居住を実践してきた。しかし、各地のグループリビングでは、居住者の加齢にともなってケアが必要となり、個別に介護サービスを利用するという経験を積み重ねてきた。この経験を収集・整理することによって、ケアを受けながらもグループリビングに住み続け Aging in Place を実現する方策を明確化し、小規模サ高住も含めて、地域包括ケアシステムに寄与する高齢者小規模共同居住のあり方を社会に提示する。

II 補助事業の直接的な目的

地域包括ケアシステムは目標概念であり、その実現のためには、医療、介護、生活支援、住まい、それぞれの領域で調査研究、方策の構築、実施、評価を行いながら、よりよいものを作り上げていく不断の努力が必要である。本調査研究は住まいの領域でその一端を試みるものであり、JKA 補助で整備されたグループリビングやそこから学んで開設したグループリビングを社会状況の変化に対応したものに進化させることに寄与するものである。また、小規模サ高住の発展可能性にも示唆を与えるものとなる。

事業内容

この事業は 3 年計画で行う予定で 2020 年度は 2 年目にあたる。1 年目は運営者を対象に、介護ニーズの上昇に伴い居住者へ運営法人自ら提供するサービス・サポートの範囲や地域のケア資源のサービス・サポートの提供状況について詳細に把握した。2 年目は、居住者の暮らしの変遷の実態を捉え、ケアへの意向反映や地域資源との連携について捉える。

1. 調査対象の選定

高齢者グループリビングや小規模共同居住の運営協法人（8 法人）を対象として選定する。

2. 事例の収集

専門的なケアのないグループリビングでは居住者が介護ニーズが高まった場合、QOLを保ちつつ住み続けることは、難しいのが現状である。このことは居住者にとっても不安材料となっている。課題を明らかにし、解決策を考えるために、これまでの介護ニーズが高くなって退去した居住者を対象に、医療、介護面とともに日々の暮らしや経済面まで詳細に調査する。各法人につき居住者2人～3人のデータを収集する。データ収集のためアンケートを作成する。

3. 関係者ヒアリング

調査対象法人に対して、事例を見ながら運営者、居住者、ライフサポーター、ケアマネージャー、ヘルパーへのインタビューを行う。これらの事例についての経験や考えたことなどヒアリングを行い、課題を明らかにし解決策を話し合う。

4. 分析

事例と関係者のヒアリングをもとに、小規模高齢者共同居住と地域ケア資源の連携の望ましいあり方を分析、整理する。居住者に向けた将来への準備に役立つ方策とともに運営者がスムーズに地域資源と連携できる知見を探る。各法人が自ら持っている資源、そして周囲にある地域資源はそれぞれ異なる。それぞれの立場で検討を行う。

5. 成果のまとめと発信

ワークショップを開催し、その議論も踏まえて報告書を作成する。報告書はHPで公開する。

継続の必要性

2019年度は地域ケア資源との連携についての運営者へのアンケートとインタビューであるが、2020年度は、退去した居住者が身体状況の変化や介護ニーズの変化に対して、どのように意思決定しながらケアを取り入れ、どのような暮らしをしていたかを経済的側面をも捉えながら入居時から退去時までの時間的変遷を把握する。そして、これらの事例を居住者、ライフサポーター、ケアマネに提示し、それぞれの立場で意見を聞く。居住者の生活実態を捉え、生活の質を落とさず暮らし続けるための議論を様々な立場から行うことは意義がある。

事業の発展性

地域包括ケアシステムは目標概念であり、その実現のためには、医療、介護、生活支援、住まい、それぞれの領域で調査研究、方策の構築、実施、評価を行いながら、よりよいものを作り上げていく不断の努力が必要である。本調査研究は住まいの領域でその一端を試みるものであり、JKA補助で整備されたグループリビングやそこから学んで開設したグループリビングを社会状況の変化に対応したものに進化させることに寄与するものである。また、小規模サ高住の発展可能性にも示唆を与えるものとなる。

グループリビングの新型コロナウイルス感染拡大防止下における生活対応

—COCO 宮内の事例から—

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、三密を避け、不要不急の外出を自粛することが要請されているなかで、高齢者にとって交流や外出の機会が減少し、フレイルのリスクが高まることが懸念されています。このような状況に対して各グループリビングでは様々な取り組みが行われています。今回は COCO 宮内の運営者 原眞澄美さんにヒアリングを行いました。

食事

これまで昼食と夕食は居住者が集まって食べていたが、居住者間の感染を避けるために各自居室で食事をすることにした。また、サポーターからの感染を防止するため、これまで手作りしていたコミュニティカフェの昼食とグループリビング内食堂での夕食を中止し、お昼はセブンミール、夕食はワタミのお弁当に変更した。お弁当を配布する時は、お互いの接触を避けるため、廊下のカウンター等にお弁当を置くが、その時にドアの外から声かけを行っている。

清掃

サポーターからの感染を防ぐため、毎日行っていた清掃の時間を 90 分から 45 分に変更した。毎日、手すりやドアなどの消毒と共用部分の窓を開け換気を徹底している。

生活支援

普段食事の時にしていた見守りができなくなったため、ライフサポーターが 1 日 1 回電話やメールで様子を聞いている。傾聴の担当者が居住者に電話で話をする機会を設けた。

地域交流

アトリエで行っていた趣味の教室は川崎市の要請で現在集合して活動することを中止しているが、教室によっては宿題を出している。

居住者の健康に対する支援

居住者に体温の計測と運動(TV 体操・散歩)を促す表を作成し配布した(写真)。これは居住者自身が毎身体調を自主的に管理するもので運営者がチェックするものではない。もし居住者の体調に変化があった場合は、運営者が適切な対応をとることになっている。

日付	曜日	午前	午後	メモ
1	(水)			毎朝みんなの体温、散歩
2	(木)			毎朝みんなの体温、散歩
3	(金)			毎朝みんなの体温、散歩
4	(土)			毎朝みんなの体温、散歩
5	(日)			毎朝みんなの体温、散歩
6	(月)			毎朝みんなの体温、散歩
7	(火)			毎朝みんなの体温、散歩
8	(水)			毎朝みんなの体温、散歩
9	(木)			毎朝みんなの体温、散歩
10	(金)			毎朝みんなの体温、散歩
11	(土)			毎朝みんなの体温、散歩
12	(日)			毎朝みんなの体温、散歩
13	(月)			毎朝みんなの体温、散歩
14	(火)			毎朝みんなの体温、散歩
15	(水)			毎朝みんなの体温、散歩
16	(木)			毎朝みんなの体温、散歩
17	(金)			毎朝みんなの体温、散歩
18	(土)			毎朝みんなの体温、散歩
19	(日)			毎朝みんなの体温、散歩
20	(月)			毎朝みんなの体温、散歩
21	(火)			毎朝みんなの体温、散歩
22	(水)			毎朝みんなの体温、散歩
23	(木)			毎朝みんなの体温、散歩
24	(金)			毎朝みんなの体温、散歩
25	(土)			毎朝みんなの体温、散歩
26	(日)			毎朝みんなの体温、散歩
27	(月)			毎朝みんなの体温、散歩
28	(火)			毎朝みんなの体温、散歩
29	(水)			毎朝みんなの体温、散歩
30	(木)			毎朝みんなの体温、散歩

※配布時間 ①9:35～10:00(朝食)、②14:05～15:00(昼食)、③18:25～19:30(夕食)

編集後記

コロナの感染が広がっているなかで、大学での打ち合わせが WEB 会議に変わりました。最初はうまくいかと心配しましたが、声だけでなく表情もわかるので雰囲気伝わりやすく、想像していた以上にいい感じでした。すでに高齢者の中にはスカイプで離れて住んでいる子供や兄弟と通信されている方もいらっしゃるようです。PC は持っていないなくてもスマートフォンを持っていればこのような対応は可能で、ウイルスの感染を心配することなくモニターを通して交流ができます。趣味の教室を集まることなしに継続できたり、表情をみながらの見守りができるなど、使いようによってはいろんな可能性がありそうです。(な)

編集委員 石原智秋 土井原奈津江